

『虚栄の市』の主要人物の特徴

——人物名の意味と言い換え表現を通じて——

中 村 豪

The Features of the Main Characters in *Vanity Fair*
as Seen in Their Names and Paraphrases

Takeshi Nakamura

Abstract

There are many interesting characters in William Thackeray's *Vanity Fair* whose names are allegorical, humorous, ironic, or meaningful. Their social positions range from the lower class to the nobility. Almost every name implies, reflects, suggests, or symbolizes the person's characteristics and such names seem to have been adopted with more or less attention to their meanings by the author. The main characters' behavior, occupations, temporary situations, or emotions, as well as the characters themselves, are often described in various paraphrases or metaphorical expressions, for example, "such a humble Cinderella; a pearl; a sunbeam; Venus; Mrs. Pride."

The purpose of this paper lies in the following three items: first, to classify the main characters into two groups. One group consists of the meaningful names, and the other consists of the loose ones. The meaningful names in the minor characters are also examined. The second aim of this paper is to interpret the meaningful names and what they tell the reader. Finally, the writer hopes to make clear the important characters' features by reference to some paraphrases.

It is safe to say that the vividness of Thackeray's main characters owes a lot to the effective use of their names and the paraphrases that accompany them. Such characters as Becky, Amelia, Dobbin, Rawdon, and Sir Pitt will be more comprehensible if we closely examine the expressions used to convey their outstanding features.

サッカリ (William Makepeace Thackeray, 1811-63) の代表作『虚栄の市』(*Vanity Fair*, 1848) は、ジョン・オズボーン (John Osborne) の一家とジョン・セドレー (John Sedley) の一家およびクローリー (Crawley) 一族をめぐって起こる悲喜劇を描いた長編歴史小説である。作中には、召使いから軍人・貴族に至るまで多数の人物が登場する。これらの人物の名前と性格との関係を検討すると、作中人物の名前は、命名の意図が感じられる意味深い名前、19世紀に流行した平凡な名前および歴史上実在した人物の名前¹の3種類に大別できる。意味深い名前は、その人物の性格または職業等を暗示したり意味したり象徴したりするという機能を持ち、効果的で面白い用法が多数見られる。これとは逆に、人物の特徴とは反対の性質を表す名前も見られる。他方、平凡な名前からその人物の性質等を想像することは難しい。

また、作者は、同一人物をその人名で表すのではなく、別の名詞（例えば、神話中の人物名）で言い換えることが多く、この手法に助けられて読者は作中人物の性格理解を深めることができる。

この小論の目的は以下の3項目である。

1. 『虚栄の市』の作中人物名を意味深い名前と平凡な名前とに分類し、人名の使い方を解説すること。
2. 意味深い名前の人物と彼らの言動、言い換えれば性格との関係を明らかにすること。
3. 主要人物がどのような名詞で言い換えられているのかを検討し、各人物の特徴を解明すること。

以下、上の順番に従って述べていくこととする。

1. 『虚栄の市』の作中人物の分類

作中の人物名がその人物の性格を表すという手法はサッカリーの独創ではなく、起源は道徳劇 (morality play) にある。これは、15世紀から16世紀前半に人気のあった宗教的寓意劇で、キリスト教信者の生き方と死に方とを芝居で教えたものであった。最も有名な道徳劇は『エブリマン』 (Everyman, c. 1510) である。この芝居の登場人物は、‘Everyman’ や ‘God’, ‘Knowledge’, ‘Beauty’, ‘Strength’ 等の、性格を示す名を持っている。また、バニヤン (John Bunyan, 1628-88) 作のアレゴリー『天路歷程』 (The Pilgrim's Progress, 第1部 1678, 第2部 1684) に登場する人物、例えば、‘Christian’, ‘Faithful’, ‘Hopeful’, ‘Wiseman’ 等はすべてその名が性格を表している。周知のように、サッカリーはこの作品の中の ‘Vanity Fair’ という言葉を彼の代表作の標題に採用した。シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) やジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) も同様の工夫による人物名を使っている。例えば、シェイクスピアでは『ロミオとジュリエット』 (Romeo and Juliet, 1595) の ‘Benvolio’ (good+will の意), 『十二夜』 (Twelfth Night, 1601) の ‘Malvolio’ (=ill+wish), ‘Sir Toby Belch’ (‘belch’ は「おくび」の意味で、この人物は酒飲み故、劇中でおくびを出す), 『ヘンリー8世』 (Henry VIII, 1612-13) の ‘Patience’ のような人物がその代表である。ジョンソンでは、『ヴォルポネ』 (Volpone, 1605-6) の ‘Volpone’ (=old fox), ‘Mosca’ (=fly), ‘Vulture’ (=vulture), ‘Corvino’ (=raven) 等がこの例である。他に、フィールディング (Henry Fielding, 1707-54) 作の『トム・ジョーンズ』 (Tom Jones, 1749) に登場するオールワージー氏 (Mr Allworthy) やオナー夫人 (Mrs Honour) も類例と見て良いであろう。

ミルドレッド・ベネット (Mildred Bennett) は、『虚栄の市』における人名の使い方を次のように説明している²。

Some of the names have symbolic significance and some apparently are used for humor or irony's sake. For certain occupations the author chooses “killing” names: Lance, the surgeon; Mrs. Briefless, the barrister's wife; Sir Thomas Coffin, the celebrated hanging judge; Dr. Ramshorn, the preacher; Mr. Bawler, minister of the Darbyites. The Miss Scratchleys fight; Mary Box is always thumping her small brother; Mr. Hammerdown is the auctioneer. Quill is a cashier; Dipley is a candlemaker. Miss Grains is the brewer's daughter; Pestler is an apothecary; Mr. Quadroon writes on the slave question.

ベネットは、ここで、『虚栄の市』の人物名の中には象徴的な意味を持つものとユーモアや皮肉のために使われているものがあることを述べ、職業を表す人物の例を挙げている。ベネットは、この引用文に続けて、性格を表す人物とユーモラスまたは皮肉な人物の例も示している。これらの作中人物

名はどのような名前に特定の意味が含蓄されているのかを知る上で大変役に立つものであり、この小論の中の表に挙げた人物名にはベネットによって教えられたものが含まれている。

次に、意味深い名前と平凡な名前との区別の基準を明確にしておきたい。作中に登場する人物名のファースト・ネームに関しては、19世紀のイングランドとウェールズにおいてポピュラーだった名前が少なくない。例えば、William や John, James, George 等の名前は、1800年にベストテンに入る名前であった。1900年の時点でも状況はあまり変わらなかった。表1を参照されたい。

表1 1800年のイングランドとウェールズにおける‘POPULAR FIRST NAMES’³

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Boys	William	John	Thomas	James	George	Joseph	Richard	Henry	Robert	Charles
Girls	Mary	Ann	Elizabeth	Sarah	Jane	Hannah	Susan	Martha	Margaret	Charlotte

したがって、当時流行していた人名の作中人物については命名の意図が感じられない。表1の太字の名前は『虚栄の市』の主要人物に使われている名前であるが、これは8種類ある⁴。勿論、命名頻度の高かった名前の方が作中人物を覚えやすいという利点もあったに違いない。しかし、サッカリーの場合には平凡な人名の使い方が混乱を引き起こす原因となる。これについては、彼の人物命名法の特徴を述べる時に触れることとする。これに対し、希有な名前または作者の創作による名前は、性格を象徴するという機能を持っている。

表1はファースト・ネームのリストであるが、サッカリーは作中人物のサーネームに意味深い名を使うこともある。例えば、ドビン (William Dobbin) 大尉の場合、Dobbinの方は意味深長なネーミングである。したがって、この小論では、姓と名のうち、いずれか一方に命名の特定の意図がうかがえる名であれば意味深い名として分類している。

『虚栄の市』には60名以上の人物が登場する。そのうち、最も中心的な人物はレベッカ・シャープ (Rebecca Sharp) とアミーリア・セドレー (Amelia Sedley) である。そして、この2名に深く関わる人物が数名見られる。レベッカと密接に関わるのは、アミーリアやジョウゼフ・セドレー (Joseph Sedley), ロードン・クロリー (Rawdon Crawley), ジョージ・オズボーン (George Osborne) およびスタイン侯爵 (the Marquis of Steyne) であり、アミーリアと関わりの深い、彼女の家族以外の人物としてはジョージとドビンおよびレベッカを挙げることができる。

作中人物が多いので、図1に、オズボーン家、セドレー家、ドビン家およびクロリー一族の人物関係を示した。凡例の中の、「怪しい関係」は、不倫が疑われる関係を意味している。

図1からも読み取れることであるが、サッカリーの人物命名法の特徴については、意味深い名と平凡な名を使ったことに加えて2点挙げることができる。その1番目は、同じ名前を濫用することである。例えば、ジョンという名の人物は5名登場する。すなわち、オズボーン家の主人、セドレー家の主人、セドレー家の馬丁、サー・ピットの執事、ドビンやジョージが利用する‘the Old Slaughter’s’という店の給仕の名前である。ジェーンという名はオズボーン家とドビン家の娘の名およびシープシヤックスのファースト・ネームとして使われている。同名の人物の例を更に挙げれば、ウィリアム、ジョージ、ロードン、ローズ、マティルダ、マーサがそれぞれ2名ずつ登場する。このうち、息子の方のジョージはしばしばジョージー (Georgy) とも呼ばれ、ロードンも息子の方はローディー

(Rawdy) とも呼ばれる。子が親と同じ名をつけられるのは珍しいことではないであろうが、サッカリーの場合には、人物の区別の上で混乱を招きやすい。なお、このような杜撰なネーミングについては中島賢二も指摘している⁵。

2 番目の特徴は、同一人物の名前が物語が進行すると別名に変わったり、家族構成が変更されたりすることである。例えば、サー・ピットの娘の一方は、最初は「ローズ」で、後に「ロザリンド」に変わる。ジョン・セドレーの妻についても同じことが言える。彼女の名は、最初は「メアリー」で後に「ベッシー」に変更される。また、ビュート夫妻の子供は最初 6 名であったのに、後に娘の人数が 1 人増えて 7 名に変わる。このようなルースな面も見られるが、これは作者の勘違いまたは不注意によるものかもしれない。更に、ドビン家の家族構成も奇妙な謎である。それは、ウィリアム・ドビン（息子の方で、この小論で扱う人物）に兄または弟がいるのかという問題である。ドビンのインド駐在中、ジョージが外出した時、この子は ‘old Sir William’（ドビンの父）と ‘Mr. Dobbin’ に会う（作品の第 46 章）が、後者が一体誰であるのかが判然としない。この Mr. Dobbin は、ウィリアム・ドビンと同様に紳士然とした風采で、ジョージに親切にふるまうが、サッカリーの迂闊な書き方によって生じた誤りとするには重大すぎる人物と思われる。しかし、この問題にこれ以上踏み込むことは本論の目的ではない。

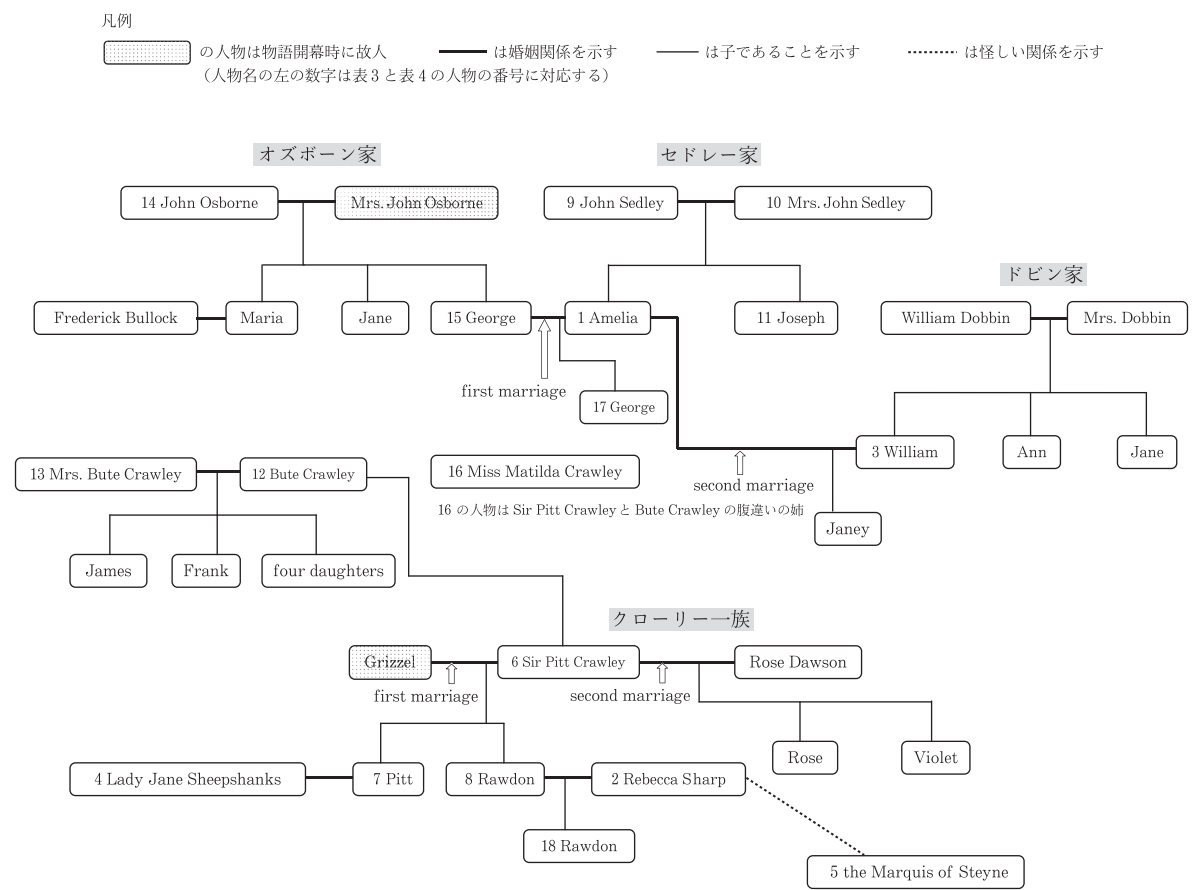


図 1 Vanity Fair 作中人物関係図

次に、主要人物は、表 2 のようになる。この表には挙げていないが、スタイン侯爵も主要人物の中に含まれる。主要人物の数はスタインも入れて合計 20 名になる。

表 2 主要人物

オズボーン家	セドレー家	ドビン家	クローリー一族
John Osborne George Osborne Maria Osborne Jane Osborne	John Sedley Mrs. John Sedley Amelia Sedley Joseph Sedley George Osborne, Jr.	William Dobbin	Sir Pitt Crawley Pitt Crawley Mrs. Pitt Crawley=Lady Jane Sheepshanks Rawdon Crawley Mrs. Rawdon Crawley=Rebecca Sharp Rawdon Crawley, Jr. Bute Crawley Mrs. Bute Crawley Miss Matilda Crawley

表 3 は、意味深い名前の主要人物の一覧である。各人物について名前の簡単な意味を便宜的に示してある⁶。なお、意味深い名前とはいっても、すべて実際に使用される名前である。表 4 は平凡な名前の主要人物のリストである。

表 3 意味深い名前の主要人物（太字部が意味深い名）

No.	作 中 人 物	名 前 の 意 味
1	Amelia Sedley	‘Amelia’ は ‘striving/eager’ の意味。作中では ‘Emmy’ とも呼ばれる。
2	Rebecca Sharp	‘Sharp’ は文字どおり ‘sharp’ の意味のほかに ‘quick, smart’ の意味を持つ。‘Rebecca’ は ‘Becky’ とも呼ばれる。
3	William Dobbin	‘Dobbin’ は人名にもあるが、‘dobbin’ は「(農家のおとなしい) 乗用馬, 駄馬; 農耕馬《しばしば老馬の名に用いられる》」 ⁷ 。作中では ‘Dob’ と呼ばれることもある。
4	Lady Jane Sheepshanks	‘Sheepshanks’ は ‘With legs like a sheep’ の意味。
5	the Marquis of Steyne	‘Steyne’ は ‘stain’ を暗示する。
6	Sir Pitt Crawley	‘Pitt’ は William Pitt (1708-78) に因んでつけられた名前。
7	Pitt Crawley	この ‘Pitt’ も William Pitt (1708-78) に因んでつけられた名前。
8	Rawdon Crawley	‘Rawdon’ は Francis Rawdon-Hastings (1754-1826) に因んでつけられた名前。

表 4 平凡な名前の主要人物

No.	作 中 人 物	備 考
9	John Sedley	
10	Mrs. John Sedley	彼女のファースト・ネームは ‘Mary’ から、後に、‘Bessy’ という名に変更される。
11	Joseph Sedley	作中ではしばしば ‘Jos’ と呼ばれる。
12	Bute Crawley	Bute は Sir Pitt Crawley の弟である。‘Bute’ は John Stuart Bute (1713-92) に因む名かも知れない。この Bute は「英国の Tory 党の政治家; 首相 (1762-63); 称号 3rd Earl of Bute」。
13	Mrs. Bute Crawley	
14	John Osborne	

15	George Osborne	
16	Miss Matilda Crawley	
17	George Osborne, Jr.	作中ではしばしば ‘Georgy’ と呼ばれる。
18	Rawdon Crawley, Jr.	作中ではしばしば ‘Rawdy’ と呼ばれる。

次に、表5は意味深い名を持つマイナーな人物を登場順に載せたリストである⁸。名前の意味または人物の簡単な説明を付した。

表5 意味深い名を持つマイナーな人物（太字の名前が意味深い名）

No.	人 物 名	名前の意味／人物の説明
1	Miss Barbara Pinkerton	‘Barbara’ には ‘barbarous’ という意味があり、この人物の経営する学校の高慢で無知な校長の名としてふさわしい。
2	Jemima Pinkerton	‘Jemima’ は ‘dove’ の意味で、姉のバーバラに従順なこの人物の性質を暗示する。
3	Sambo	‘sambo’ は「黒人」を意味する。彼は文字どおり黒人である。
4	Miss Swartz	‘Swartz’ は「黒い」の意味でドイツ語の ‘schwarz’ にあたる。彼女は黒い。
5	Kirsch	‘kirsch’ は「キルシュ、桜桃酒《ドイツ産のブランデー》」。Kirsch は、酒好きな男で、Joseph がバンパニケルに旅をした時の、彼の従僕である。
6	Lance the surgeon	‘lance’ は外科用語で「ランセット、刃針、刺絡針」の意味。surgeon にふさわしい名前。
7	Mrs. Flamingo	この夫人は深紅の絹のガウンを着ている。フラミンゴのような色を連想させる名前。
8	the two Miss Scratchleys	Scratchley 姉妹はいつも喧嘩・口論をしている。‘scratch’ という語を使った架空の人名。
9	Mary Box	Mary Box はいつも弟を殴りつけている。動詞の ‘box’ を使ったユーモア。
10	Mr. Quadroon	‘quadroon’ は「四分の一混血児」の意味。Quadroon は奴隷問題について白紙委任を受けているので、彼の肌の色を暗示する名前。
11	Mrs. Rougemont	‘Rougemont’ は ‘rouge’ にかけた滑稽な言葉。Mrs. Rougemont は 65 歳の女優で Vere Vene という中年男と駆け落ちをする。
12	Miss Trotter	結婚したての Miss Trotter（足の速さを暗示）は、夫の、足を引きずって歩く Lord Methuselah（「メトセラのような長命者」の意）よりも先に旅行用馬車に乗り込む。
13	Mr. Deuceace	Deuceace はギャングラーである。‘deuceace’ は「不運、貧乏くじ」の意。
14	Mr. Quill the cashier	‘quill’ は「羽ペン、驚ペン」の意味で、現金出納係 Mr. Quill にふさわしい名前。
15	old Miss Toady	‘Toady’ は「(いやしい) おべっか使い」の意味。Miss Toady は Mrs. Briefless にお世辞を乱発する。
16	Mrs. Briefless , the barrister’s wife	‘Briefless’ (‘briefless」「訴訟依頼人のない」の意) は barrister の妻を皮肉に表現する名前。
17	Mr. Hammerdown	Mr. Hammerdown はセドレー家の財産処分オークションの際の競売人で、ハンマーを振り下ろす。
18	Mrs. Highflyer	‘highflyer’ は「野心家」の意味。

19	Miss Grains	この人物は醸造業者の娘で ‘grain’ と関係のある名前。
20	Mr. Pestler	‘pestle’ は「乳棒です、つく」の意味。Pestler は apothecary である。
21	Sir Thomas Coffin	この人物は絞首刑の判決をくだすことで有名な判事である。したがって ‘coffin’ と関係がある。
22	Mr. Smirk	‘smirk’ は「作り笑い」。彼は、‘the celebrated Lady’s doctor’ であり、この名は気取りまたは追従を暗示する。
23	Lady Slingstone	Lady Slingstone (<sling+stone) は他人の悪口を盛んに言うタイプの人物。
24	Lady Stunnington	‘Stunnington’ は ‘stunning’ を使った造語。Becky はこの人物の攻撃にも全然驚かない。
25	Lord Heehaw	‘heehaw’ は「馬鹿笑い」の意味。
26	Dives	Dives は聖書に由来する名前で「富者、金持ち」の意味。彼は裕福である。
27	Jack Thriftless	‘thriftless’ は「金遣いの荒い」の意味。この人物はヨーロッパの方々に借金がある。Thrift は人名にも使われる言葉である。
28	Lady Bareacres	‘Bareacres’ は貧しさを暗示する。彼女の台所は苦しい。
29	young Green , the Rifles	‘Green’ は「若い、未熟な」を意味する。
30	Mrs. Mantrap	‘Mantrap’ は「(男を誘惑する) 魅惑的な女、妖婦」の意味。
31	Mrs. Kirk	‘kirk’ は「教会」の意味。この夫人は宗教に熱心で周囲の人物に信仰を強制する。
32	Mrs. Winkworth	彼女は大きな瞳を持っているのでこの名がふさわしい。
33	the Honourable Capt Famish	この人物は債務者拘留所に入れられた時、暴飲した。‘Famish’ は皮肉な名前として使われている。(‘Capt’ は原文のまま。)
34	Master Todd	Todd (‘fox’ という意味) はジョージの学友で彼を崇拝する。Todd の友情は十分報われる。
35	Mulligatawney	これは、‘a spicy soup’ を意味する ‘mulligatawny’ から作者によって作られた滑稽な名前。

表3～表5によって分かることは以下ようになる。

- 主要人物のうち、意味深い名を持つ者の数は平凡な名前の人物の数よりも少ない。そのうち、意味深い名前は各人物の性格を的確に表すものが大半を占める。表3の4と6の人物(レディ・ジェーン・シープシャンクスとサー・ピット・クローリー)を除く人物がこれに該当する。これらは入念なネーミングによるものであろう。それ以外の人物名については、「シープシャンクス」は滑稽感を出すために付けられた名であり、6の「サー・ピット・クローリー」は反語的であると言える。
- 他方、平凡な名の主要人物の特徴は、ほぼ例外なく俗物性を持っていることである。例外は、18のローディーのみである。
- サッカリーはマイナーな人物に対して、滑稽な、または皮肉な命名を行っている。彼らの名は、性格、人種、職業、特徴的な行動、貧富、老若、信仰等を暗示または象徴する機能を担っておりユーモラスなものが目立つ。サッカリーは、これらの人物に楽しみながら名を与え性格を創造したと想像される。
- このような名前の機能により、読者は、平凡な名の主要人物ではなくても、即座にその性格を類推することができる。作者の、名前の使い方に面白さと工夫が感じられる。

2. 意味深い名前の人物と性格との関係

次に、表3の意味深い名前の人物と彼らの性格との関係を表の人物名の順番に従って明らかにしよう。なお、性格については3において更に詳しく触れるので、ここでは簡単に述べることにしたい。

① Amelia Sedley: ‘Amelia’ は ‘striving/eager’ の意味。‘striving’ という性質は、ジョージの死後、家族を支えることに専心し努力する行動に表れる。彼女は、苦しい家計を維持しジョージとの生活を継続するために必死の努力をする。‘eager’ は、ジョージとの結婚前の彼女に当てはまる。ジョージのことばかりを想ってその訪問を切望していた姿を象徴する。なお、彼女の名はフィールディングの作品『アミーリア』(Amelia, 1751) から採ったのかもしれない。

② Rebecca Sharp: ‘Sharp’ は文字どおり ‘sharp’ の意味のほかに、‘quick, smart’ の意味がある。この小説の中に、以下の記述が見える。引用文中の ‘sharp’ は ‘Sharp’ にかけて言葉遊びでもある。

Though Rebecca had had the better of him [George], George was above the meanness of tale-bearing or revenge upon a lady, —only he could not help cleverly confiding to Captain Crawley, next day, some notions of his regarding Miss Rebecca—that she was a sharp one, a dangerous one, a desperate flirt, &c.; in all of which opinions Crawley agreed laughingly, and with every one of which Miss Rebecca was made acquainted before twenty-four hours were over. (*Vanity Fair*, p. 149⁹)

なお、‘Rebecca’ という名前はスコット (Sir Walter Scott, 1771-1832) の『アイヴァンホー』(*Ivanhoe*, 1819) の作中人物の Rebecca に惹かれて採用したものかもしれない。というのも、サッカリーは『アイヴァンホー』の続編にあたる『レベッカとローウィーナ』(*Rebecca and Rowena*, 1849) を書いているからである。

③ William Dobbin: ‘William’ はポピュラーな名であるが、‘protector’ の意味を持つ名前であるので、あるいはサッカリーはこの含みを持たせたかったのかもしれない。‘William’ を意味深い名前と解釈すれば、アミーリアの守護神としての彼の性格に完全に合致する。‘Dobbin’ は元来 ‘Robert’ のペットネームであるが、人名辞典では ‘A common diminutive of Dobb (Robert)’ と説明している¹⁰。そして、普通名詞としての ‘dobbin’ は「(農家のおとなしい) 乗用馬, 駄馬; 農耕馬《しばしば老馬の名に用いられる》」であり、*OED* には ‘An ordinary draught or farm horse; sometimes contemptuously, an old horse, a jade.’ と出ている。この名前は彼が崇拝した少年時代のジョージと彼が密かに恋慕するアミーリアに対する黙従的態度を象徴的に示しており、内気で謙虚、温和でしかも勇敢なドビンに似合う。なお、『ヴェニス商人』(*The Merchant of Venice*, 1596-97) の第2幕第2場にもドビンという名が見える(但し、馬の名前である)。

更にうがった見方をすれば、ドビン一家の名は作者の家族名に由来するとも考えられる。なぜなら、サッカリーにはアン (Anne) とジェーンという娘があったがこれらの名前がドビンの妹の名として使われているからである¹¹。

④ Lady Jane Sheepshanks: ‘Sheepshanks’ は ‘With legs like a sheep’ の意味。*OED* は、‘sheepshank’ の名詞の説明として ‘The shank or leg of a sheep.’ と説明している。多分、これは彼女の母親のレディ・サウスダウン (Lady Southdown) に関係づけられる滑稽な名前であり、作者のユーモアであろう。‘Southdown’ は「サウスダウン《イングランド原産の小形の肉用羊の一品種》」で、人名ではないようである(人名辞典には見当たらない)。

⑤ the Marquis of Steyne: ‘Steyne’ は人名の ‘Stain’ と ‘Stein’ の異形で、‘stain’ を暗示する。この暴君的な破廉恥な悪徳貴族に見事に適合する名前である。なお、この人物にはモデルがあって、多分、the second and third Marquises of Hertford であると想像されている。第3代のハートフォード侯爵は死後スキャンダルに包まれた由である¹²。

⑥ Sir Pitt Crawley: ‘Pitt’ という名前については、『虚栄の市』の中で、語り手が、“Sir Pitt Crawley (named after the great Commoner), was the son of Walpole Crawley, first Baronet, of the Tape and Sealing-Wax Office in the reign of George II.,” (65) と述べている。‘the great Commoner’ とは William Pitt (1708-78) を指す。William Pitt は、英国の政治家で首相 (1766-68)、通称 the Elder Pitt と呼ばれ、七年戦争 (1756-63) を勝利に導いた功労者である。1766年、‘first Earl of Chatham’ となった。作中のピットは自滅型の人物である。したがって、彼の場合には、ピットという名を裏切る結果になったと言える。

⑦と⑧ Pitt Crawley と Rawdon Crawley: これら2名の名前については、『虚栄の市』の語り手が、“She [Grizzel] brought him [Sir Pitt Crawley] two sons: Pitt, named not so much after his father as after the heaven-born minister; and Rawdon Crawley, from the Prince of Wales’s friend, whom his Majesty George IV. forgot so completely.” (66) と書いている。この引用文中の ‘the heaven-born minister’ は William Pitt を指し、‘the Prince of Wales’s friend’ は Francis Rawdon-Hastings (1754-1826) を指している¹³。このように、サー・ピットの長男のピットは父親と同じく William Pitt に因んで命名されており、この名は彼にふさわしい。なぜなら、彼は世故にたけたインテリで堅実な人生を送ることに腐心し、ミス・クロリーへの遺産を獲得してからますます安定した地位に納まるからである。他方、ロードンは決闘で相手を殺した経験があり、ロードン・ヘイスティングズも決闘に関わったことがあるため、「ロードン」は彼にふさわしい名前である。

因みに、ベネットは ‘Crawley’ という名前について、“Becky Sharp is not named Sharp by accident. Neither are the Crawleys, who use every means to crawl up the social and monetary ladder.”と述べている¹⁴。しかし、‘Crawley’ の名を持つすべての人物に対して彼女の説明が適合するわけではないので、表3の ‘Crawley’ を意味深い名前であるとは解釈しなかった。

3. 言い換え表現と各人物の特徴

『虚栄の市』では、人物を指す場合、人名が単独で使われたり、代名詞で置き換えられたりすることに加えて、以下のような4種類の言い換えのパターンが多い。この分類はサッカリの文体に関わる興味を惹き起こす。各パターンの右に挙げたのは作中の例で、言い換えの対象となっている人物はすべてアミーリアである。

①形容詞または形容詞相当語句+当該人物の名: ‘that pretty Miss Sedley’

また、‘that little pink-faced chit Amelia’ のような同格表現も ‘one of the most charming young women that ever lived’ のように形容詞節によって修飾される表現もこのパターンに含めてある。

②別の名詞による言い換え: ‘an innocent’

③形容詞または形容詞相当語句+名詞: ‘such a harmless, good-natured creature’

④比喩的表現による言い換え: ‘such a humble Cinderella’; ‘a pearl’; ‘kindly, homely flower’;

‘a sunbeam’; ‘Venus’; ‘Mrs. Pride’¹⁵

このように、4種類の言い換えのパターンが見られるが、これらは作中人物の性格や才能、境遇、職業等を理解する上で大いに有益である。また、表現が豊かである。しかし、この小論では、表6の中で、言い換え表現を上記の分類ではなく、人物の長所を示す表現、短所を示す表現、才能・境遇を示す表現、比喩的表現の4種類に分類している。なぜなら、そのように分ける方が人物の性格が分かりやすくなるからである。言い換えの中には、作中の普遍的性格ではなく一時的な性格を示す表現も含めている。例えば、ドビンについての ‘a skeleton’ や ‘this love-smitten and middle-aged gentleman’ がこれに該当する。

表6には、主要な作中人物の代表的な言い換え表現を人物毎にまとめてある。但し、各人物について適合しない表現はこのリストに記載しなかった。例えば、スタイン侯爵の手先ウェナム (Wenham) がロードンとマクマード大尉 (Captain Macmurdo) に対して、“I declare I think that your [Rawdon’s] suspicions are monstrous and utterly unfounded, and that they injure an honourable gentleman [Steyne] who has proved his good will towards you by a thousand benefactions—and a most spotless and innocent lady [Rebecca].” (553) と弁明する場面があるが、この台詞の中の ‘an honourable gentleman’ と ‘a most spotless and innocent lady’ はどちらも虚言であるので、表6には入れなかった。

なお、作中では、類似した言い換えが幾度か現れるが、そのような表現は代表的なもののみをこの表に記載している。

表6の言い換えの中には、作中の文脈を示さないとその言い換えの意味の見当がつきにくいものもある。例えば、ドビンは少年の頃、学友から ‘Figs’ というあだ名で呼ばれていたが、その理由は作品を読まないと分からないであろう。しかし、リストの中の大半の表現はそれぞれが使われている文脈なしでも理解が可能と思われる。各人物についての表現を順番に辿るだけでもその性格の輪郭ないしイメージが浮かび上がって来る。

表に挙げた言い換えの中には類似した語句も見られる。例えば、ベッキーを表す語句として、‘a viper’ と ‘this serpent’ というほぼ同意の語が使われたり、‘a perfect Bohemian’ と ‘a wanderer’ が使われたりしている。

表6 主要な作中人物を示す名詞（言い換え表現を分類して小説で出現する順番にほぼ従って挙げた表）

	人 物	言い換え表現
1	Amelia Sedley	長所を示す表現: the amiable Miss Sedley; that little pink-faced chit Amelia; one of the most charming young women that ever lived; that pretty Miss Sedley; one of the best and dearest creatures that ever lived; so guileless and good-natured a person; such a harmless, good-natured creature; the best-natured and most unaffected young creature; this gentle little heart; the best, the kindest, the gentlest, the sweetest girl in England; gentle and loving soul: this soft and gentle creature; this worthy woman; his [John Sedley’s] kind and vigilant nurse; the gentle and uncomplaining little martyr; a good-natured harmless pauper 短所を示す表現: the silly thing; an innocent; the pure bashful maiden; a slave; that simple yielding faithful creature; a humble foolish creature; a namby-pamby milk-and-water affected creature; Poor simple lady, tender and weak; her pious simple heart; the timorous mother; his [Georgy’s] timid companion;

		<p>that absurd little Emmy; silly, heartless, ungracious little creature</p> <p>才能・境遇を示す表現: the first singer in the world; a Stockbroker's daughter; a bankrupt's daughter; this poor harmless victim of the war; the young widow; that tender lonely soul; the good-natured little artist</p> <p>比喩的表現: such a humble Cinderella; a pearl; kindly, homely flower; a sunbeam; Venus; Mrs. Pride; the bird which he [Dobbin] had been trying all his life to lure; tender little parasite; the sweetest, the purest, the tenderest, the most angelical of young women; that angel; a stone to me [Dobbin]; such a dauntless virago; The little heedless tyrant; the prize</p>
2	Rebecca Sharp	<p>長所を示す表現: a good-humoured girl; A nice, gay, merry young creature; a droll funny creature; a neat little filly; a little paragon; the fair governess; a sharp one; a young lady of too much resolution and energy of character; Green eyes, fair skin, pretty figure, famous frontal development; one of the most fascinating women; William's most ardent admirer and champion</p> <p>短所を示す表現: the poor devil; the friendless girl; our little adventurer; an artful little hussey; a humbug; that corrupt heart; a wicked woman—a heartless mother, a false wife; the criminal; this young misanthropist; misogynist; the little artful creature; the little artful minx</p> <p>才能・境遇を示す表現: the orphan child; a musician and a good linguist; the poor child; so clever an artist; a perfect performer; mistress of the house; a rare manager; the indomitable little aide-de-camp's wife; an abandoned wretch; an outcast; the best dancer in the room; such an amanuensis; a splendid actress and manager; a boarding-house queen; the consummate little tragedian; a born woman of fashion; a perfect Bohemian; a wanderer, poor, unprotected, friendless and wretched</p> <p>比喩的表現: such a dangerous bird; such an eagle; a viper; this monster, this serpent, this firebrand; a little jewel; a sly little devil; a little fox; Delilah; a superior bad angel; an accomplished little devil; this syren; the little Circe; this little Ishmaelite; the charming Clytemnestra</p>
3	William Dobbin	<p>長所を示す表現: the good-natured Captain; the honest fellow; a very brave champion; this amazing champion; the best officer and the cleverest man; the soft-hearted Captain; this dexterous captain; George's guardian, Dobbin; a reserved but well-informed and meritorious officer; the worthy Major; such an accomplished man as Major Dobbin; our [Amelia and Georgy's] dearest, truest, kindest friend and protector; a fine feller; one of the best and most upright of men; a pious and reverent soul; a spooney; this quiet gentleman; the simple-hearted Major; such a husband as that—a man with a heart and brains; that kind-hearted and simple gentleman; that excellent, high-minded gentleman; the generous Major; the best man in all the world; the gentlest and the kindest, the bravest, and the humblest</p> <p>短所を示す表現: the very last of Doctor Swishtail's scholars; a very tall ungainly gentleman with large hands and feet; the gawky young officer; a more consummate hypocrite</p> <p>才能・境遇を示す表現: the great promoter, arranger, and manager of the match between George Osborne and Amelia; a skeleton; this artful Major; this love-smitten and middle-aged gentleman</p> <p>比喩的表現: Figs; his [George's] valet, his dog, his man-Friday; this uproused British lion; this Machiavellian captain of infantry; Major Sugarplums; a great Newfoundland dog; such a treasure; the bamboo-cane; The vessel; the rugged old oak to which you [Amelia] cling</p>
4	Lady Jane Sheepshanks	<p>長所を示す表現: the simple little secretary; Dev'lish nice little woman; his [Rawdon's] good-natured sister Lady Jane; that soft-hearted woman; That dear good wife of yours [Pitt Crawley's]; a true and faithful wife; godmother to Mrs. Dobbin's child</p>

5	the Marquis of Steyne	短所を示す表現: that bald-headed man with the large teeth; this old cynic; an anchorite; a fool in her [Rebecca's] hands; dog; coward and villain; that scoundrel; a liar and a coward; an unprincipled wretch; a very great and powerful but unprincipled man; The atrocious monster
6	Sir Pitt Crawley	短所を示す表現: a man in drab breeches and gaiters, with a dirty old coat, a foul old neckcloth lashed round his bristly neck, a shining bald head, a leering red face, a pair of twinkling grey eyes, and a mouth perpetually on the grin; a man of the world; an old, stumpy, short, vulgar, and very dirty man, in old clothes and shabby old gaiters who smokes a horrid pipe, and cooks his own horrid supper in a saucepan; a philosopher with a taste for what is called low life; that incorrigible old man; a stickler for his dignity; a more cunning, mean, selfish, foolish, disreputable old man; a man who could not spell, and did not care to read— who had the habits and the cunning of a boor ...; an old <i>put</i> and old <i>snoob</i> , an old <i>chaw-bacon</i> ; the rascal; that odious brother of mine [Bute Crawley's]; that old wretch 才能・境遇を示す表現: a busiest man and magistrate of his County; Pitt the diplomatist; a Baronet with four thousand a year
7	Pitt Crawley	長所を示す表現: the only friend or protector Lady Crawley ever had; the only person besides her [Lady Crawley's] children for whom she entertained a little feeble attachment; a very polite and proper gentleman; a man of such rigid refinement; country gentleman; an ambitious man; the most delightful and accomplished of men; a genius; a martyr to duty; a man of books and peaceful habits; a real old English gentleman, in a word,—a model of neatness and every propriety; a very clever man 短所を示す表現: that puling hypocrite of a brother of his [Rawdon's]; that Methodist milksop of an eldest son; The sneak; a frigid man of poor health and appetite; an utter cast-away; this profound dissembler; a d—bore 才能・境遇を示す表現: private Secretary to Lord Binkie; attaché to the Legation at Pumpernickel; the foreign minister of the day; a magistrate, and an active visitor and speaker among those destitute of religious instruction; a diplomatist; that aristocratic religionist; that scientific man; a magistrate, a member of parliament, a county magnate and representative of an ancient family 比喩的表現: Miss Crawley; Machiavel
8	Rawdon Crawley	長所を示す表現: A perfect and celebrated 'blood' or dandy about town; an Adept in all these noble sciences [Boxing, rat-hunting, the fives' court, and four-in-hand driving]; a devilish good, straight-forward fellow; a fire-eating and jealous warrior; a fine fellow; the gallant officer; the big guardsman; a red-faced warrior; a very good Écuyer...; a very watchful and exemplary domestic character 短所を示す表現: that scoundrel, Rawdon Crawley; an infernal character; a gambler; a drunkard; a profligate; this scoundrel, gambler, swindler, murderer of a Rawdon Crawley; The infamous dog; this villain; that beast Rawdon Crawley; the great blundering dragoon; a rogue; the waggish officer; silly, blind creature; naughty, good-for-nothing man; a heavy dragoon with strong desires and small brains; a profligate, lost, and abandoned being; this wicked man; veteran rake, Rawdon Crawley; this unfortunate wretch of a Rawdon Crawley; the horrid nephew; a fool; the abominable Rawdon; this great lazy gourmand; a foolish dull fellow; a torpid, submissive, middle-aged, stout gentleman 才能・境遇を示す表現: a very happy and submissive married man; the wounded husband; first favourite for this race for money; the penniless Colonel; poor battered fellow; a prisoner away from home; that poor wayworn sinner; the bully; a beggar; a tyrant; a ruffian; the confounded blackleg 比喩的表現: Samson

それでは、表6の言い換え表現から人物の特徴を説明しよう。なお、人物によっては性格を分類したものもある。

① アミーリア・セドレー

アミーリアはこの表の長所を示す表現から分かるように、望ましい性質をほぼすべて備えている。美しく優しく善良な人物である。彼女は、真珠や天使、日光、ヴィーナス等に譬えられている。外向的・社交的な人物というよりも、むしろ家庭的な性質の持ち主である。彼女の美点は、以下の諸点に認められる。

- I. ピンカートン女学校を去って実家に戻った時、ベッキーを歓待し、惜しみなく贈り物を与え、ベッキーとジョウゼフとの結婚を実現させようと努めたこと。
- II. ジョージが戦死した後、クラップ(Clapp)夫妻の世話になりながら、間借りの苦しい生活に耐えつつジョージと両親のために家計を切り盛りし献身的に仕えたこと。但し、アミーリアの愛情は両親よりもジョージの方に多く注がれがちだったことは否定できない。
- III. 父親が老衰した時、あくまでも優しく看護したこと。
- IV. ジョージをジョン・オズボーンに引き渡した事。言い換えれば、自分の我儘を抑え、プライドを捨てたこと。
- V. 彼女と関わるどのような人物に対しても、常に親切で寛大、謙虚さを忘れないこと。但し、ドビンに対しては例外的な態度を取ることがある。

次に、アミーリアの美点を引用によって挙げておきたい。太字の部分は、表6の比喩的表現に挙げた言い換えである。これは、ジョン・セドレーの死期が近づいた時の場面で、彼女がいかに甲斐甲斐しく父親を看護し、それに対して、ジョンがどれほど感謝したのかが述べられた個所である。

He [John Sedley] loved his daughter [Amelia] with more fondness now, perhaps, than ever he had done since the days of her childhood. In the discharge of gentle offices and kind filial duties, this simple creature shone most especially. "She walks into the room as silently as **a sunbeam**," Mr. Dobbin thought, as he saw her passing in and out from her father's room: a cheerful sweetness lighting up her face as she moved to and fro, graceful and noiseless. (605)

このようなアミーリアの姿はドビンには日光のように神々しく映る。

他方、彼女の短所は、世間知らずのお人好しであり、他の人物の性格を正しく見抜く能力がきわめて乏しい点にある。純朴すぎる性質が目立つ。「知」よりも「情」に支配される人物である。それは次の諸点に表れている。

- I. 物語の冒頭部に、ベッキーが、自分に与えられたジョンソン博士の辞書を馬車から投げ捨てる場面があるが、このふるまいからだけでもベッキーの本質に気付くべきであるのにそれができないこと。
- II. アミーリアはナポレオン戦争の動向にはほとんど無関心であり、彼女にとってはジョージが皇帝でありヨーロッパを意味すること。
- III. ジョン・セドレーの破産後、ドビンはセドレー家の家財の競売でアミーリアのお気に入りのピアノを落札し、匿名で彼女に贈るが、アミーリアはそれがジョージの厚意と信じて疑わないこと。
- IV. 結婚後のジョージの彼女に対する仕打ちは冷たいものであり、彼女は結婚を後悔さえすることが

あるが、彼の死後は、そのような亡夫の態度を忘れ、ジョージを偶像化して盲目的に崇拝すること。

V. 人物の言動や出来事に対して無知で皮相な観察しかできない点。例えば、小説の終盤で、アミーリアは、ドビンから、ベッキーをアミーリアが滞在するホテルの部屋に同宿させるべきではないという賢明な忠告を受ける。しかし、アミーリアはこれを憤慨しながら斥ける。これは、ベッキーの巧みな話術に欺かれたためである。

VI. 極度にセンチメンタルであること。

最後に、アミーリアの欠点がベッキーによって非難される場面を引用しよう。これは、この小説の山場の1つであり、ドビンがアミーリアと半ば喧嘩別れをしてから、ベッキーがアミーリアを諷める個所である。太字部は、表6の短所に挙げられている言い換えである。

“I [Rebecca] want to talk to you [Amelia]. ...You must marry, or you and your precious boy [Georgy] will go to ruin. You must have a husband, you fool; and one of the best gentlemen I ever saw [Dobbin] has offered you a hundred times, and you have rejected him, you **silly, heartless, ungrateful little creature!**”

“I tried—I tried my best, indeed I did, Rebecca,” said Amelia, deprecatingly, “but I couldn’t forget—,” and she finished the sentence by looking up at the portrait [George’s portrait]. (680)

このように、ベッキーはアミーリアの愚かさ、薄情さ、忘恩を責め、彼女に結婚を勧めるが、アミーリアは亡夫に固執していたことを白状している。彼女はドビンに対して無限の感謝を捧げる立場であったにも拘わらず、ドビンの愛情に乗じて暴君のようにふるまい、彼に絶対的服従を要求していた。

② レベッカ・シャープ

端的に言えば、彼女は虚栄に生きているので『虚栄の市』の代表的人物である。また、彼女の足跡を辿れば、そのボヘミアンの生き方が鮮明になる。

ベッキーの長所は、他の人物の性格を迅速に読み取るという賢さを持っている点、ユーモアのセンスがあること、歌と踊りの才能に恵まれていること、フランス語を達者に話すこと、文才も豊かで事務処理能力が高いことである。楽天的な強さを備えた性格の持ち主である。また、役者としても一流である。実際、彼女は人生という舞台上、各場面に応じて臨機応変に自分の望みどおりの役柄を演じている。ピンカートン女学校に入る前には大人しい少女を装い、セドレー家を訪れた時には不幸な孤児を演じ、上流社会では貴族の夫人のようにふるまうことができる。更に、「ならず者の夫」に子供を奪われた哀れな母親を演じてアミーリアを欺くこともできる。但し、このような役者の才能は欺瞞的性格とも言えるであろう。

『虚栄の市』第2章に、ベッキーが次のように説明されている個所がある。太字部は、表6の比喩的表現に挙げられている言い換えである。

By the side of many tall and bouncing young ladies in the establishment [Miss Pinkerton’s academy] Rebecca Sharp looked like a child. But she had the dismal precocity of poverty. Many a dun had she talked to, and turned away from her father’s door, many a tradesman had she coaxed and wheedled into good-humour and into the granting of one meal more. She sate commonly with her father who was very proud of her wit—and heard the talk of many of his

wild companions—often but ill suited for a girl to hear. But she never had been a girl she said, she had been a woman since she was eight years old. O why did Miss Pinkerton let **such a dangerous bird** into her cage? (12)

この描写から、ベッキーがいかに早熟であったか、子供時代から大人を手玉に取っていたか、機知に恵まれていたか、子供にふさわしくない会話を聞いていたかが分かる。8歳の時から（一人前の）女だったとは驚きである。ミス・ピンカートンはベッキーの猫かぶりにまんまと騙される。

また、ワーテルローの戦いの前夜、物語の語り手は、“If this is a novel without a hero, at least let us lay claim to a heroine. No man in the British army which has marched away, not the great duke himself, could be more cool or collected in the presence of doubts and difficulties, than **the indomitable little aide-de-camp’s wife** [Becky].” (299) とコメントしている。太字部は、才能・境遇を示す表現である。ここにもベッキーの強さが見られる。彼女は夫を戦場へ送り出すに際して、夫よりも冷静または冷酷に事態を静観できる。夫の方が感傷的になったほどである。因みに、アミーリアは、ベッキーとは対照的な不安を見せる。語り手が言うとおりの、あえてヒロインを探すとすればベッキーである。

ベッキーの美点として特筆すべき功績が一つある。それは、小説の終幕で、アミーリアに対して、ドビンの偉大さを認識させることである。ベッキーは、ジョージがワーテルローの戦いの前夜にベッキーに密かに渡した付け文を暴露するが、これがなかったなら、アミーリアはドビンと結婚しなかったかもしれない。ベッキーはドビンの真価を認めていたので、ジョージのような俗物の面影にアミーリアが固執することに我慢がならなかったのである。

他方、ベッキーの短所を示す表現から分かるとおり、彼女は母親失格である。実子ローディーを疎んじるばかりか憎みさえる。夫に対しては不誠実な妻であり、スタイン侯爵との不倫を怪しまれる関係にある。彼女に仕える召使いたちに対しては、忘恩の仕打ちをして憚らない。この性格は彼女の生い立ちと境遇に由来するので、情状酌量の余地もある。しかし、彼女はロードン、ラッグルズ (Raggles)、ブリッグズ (Briggs) やジョウゼフを破滅させるので悪女と言わざるを得ない。また、‘our little adventurer’ と呼ばれるベッキーの悪知恵はスタイン侯爵の狡猾な頭脳を凌駕する。なぜなら、彼女はこの貴族を騙して1千ポンドを巻き上げることに成功するからである。このような手腕にはスタインさえ驚嘆する外ない。

比喩的表現は、ベッキーが恐ろしい怪物のような存在であることを示している。例えば、‘this monster’, ‘a sly little devil’, ‘this syren’, ‘the little Circe’ のような言い換えによって、彼女は、外見は美しいが性格は醜いことが明らかである。また、ベッキーの比喩的表現の中に「デリラ」(“Delilah”) があるが、これはロードンの比喩的表現の「サムソン」(“Samson”) と対をなす。というのも、これらはどちらも聖書に見える人物で、サムソンの愛人であるデリラは彼を欺いてペリシテ人に渡したからである。

同じく、比喩的表現の中に ‘the charming Clytemnestra’ があるが、これも夫に対する裏切りを暗示する意味深長な言い換えと解釈できる。ベッキーは作中でシャレード (charade) が演じられる場面 (第51章) でクリュタイムネストラを巧みに演じたため観客から絶賛されるが、この役柄ゆえに「魅力的なクリュタイムネストラ」と呼ばれる。クリュタイムネストラは「ギリシャ神話で、ミュケ

ナイの王アガメムノンの妃。スパルタ王テュンダレオスとその妻レダの娘で、アガメムノンとの間にエレクトラ、イフィゲネイア、オレステス、クリュソテミスの子をもうける。しかし、アガメムノンはギリシャ軍の総大将としてトロイアに遠征する時、艦隊の出帆を可能にするために娘のイフィゲネイアを犠牲にしてしまう。これをうらんだクリュタイムネストラは、夫の出征中にアイギストスと通じ、共謀して、凱旋した夫と彼が愛人として連れ帰ったトロイア王女カッサンドラを殺害する。二人は7年間ミュケナイをおさめるが、息子オレステスに復讐され殺された」という説明が、ある百科事典に見える¹⁶。作中のシャレードで演じられるのは、クリュタイムネストラが夫を殺す場面である。夫を演じているのは、ベッキーの実際の夫ロードンである。この芝居を観たスタインは、“By—, she’d do it too,” (511) と言う。この引用中の ‘she’ はベッキーを指し、‘it’ は夫殺しを意味する。ベッキーにクリュタイムネストラ役を割り当てることによって、作者は彼女とスタインとの間の不義を暗示しているのであろう。「夫殺し」については、ロードンではなく、ベッキーが後に奴隷のように支配する相手ジョウゼフに当てはまる行為である。なぜなら、『虚栄の市』最終章に、作者が描いた ‘Becky’s second appearance in the character of Clytemnestra’ という題のイラスト(図2)があり、その絵の中でベッキーがナイフのような品を手にカーテンの陰に隠れている様子が見えるからである。この絵は、ベッキーとの生活に疲れ彼女に対して恐怖を抱くジョウゼフが、ドビンに苦境からの救援を懇願する場面を描いている。ジョウゼフはこの時のドビンとの再会から3ヵ月後に死去する。ベッキーが自分で手を下して彼を殺したの可否かは慎重な検討を要する問題であるが、少なくとも彼を衰弱させ死期を早めたことは間違いない。クリュタイムネストラ的である。

図2¹⁷

以上、ベッキーの特徴を挙げてみたが、彼女は美德よりも悪徳が目立つ人物であり、しかも憎みきれない個性を備えた人物とすることができる。

③ ウィリアム・ドビン

ドビンは、俗物たちが跋扈する虚栄の市の例外的人物である。「例外的人物」とは作中で虚栄または高慢に支配されない人物あるいは俗物ではない人物という意味である。『虚栄の市』では、このような人物は極めて少なく、ドビン以外の主要人物では、アミーリア、レディ・ジェーン、ローディーのみである。ドビンを「地の塩」(the salt of the earth) または「世の光」(the light of the world) に譬えても良い。本当の紳士である。この小説の副題に拘わらず、ヒーロー的人物を探すとすればドビンが筆頭である。その証拠は、『虚栄の市』の語り手自身の次の叙述に見える。これは、ドビンがアミーリアやジョージを伴ってドイツへ旅をした際の彼らに対するコメントとなる記述である。語り手は、先ず、それまでにアミーリアが紳士に会ったことがなかったという点を指摘し¹⁸、続いて紳士は多分あまり多くは存在しないと語り、更に紳士の条件を列挙している。そして最後に、紳士のリストを作ろうと述べる。

And it must be remembered, that this poor lady [Amelia] had never met a gentleman in her life until this present moment. Perhaps these are rarer personages than some of us think for. Which of us can point out many such in his circle—men whose aims are generous, whose truth is constant, and not only constant in its kind but elevated in its degree; whose want of meanness

makes them simple: who can look the world honestly in the face with an equal manly sympathy for the great and the small? We all know a hundred whose coats are very well made, and a score who have excellent manners, and one or two happy beings who are what they call, in the inner circles, and have shot into the very centre and bull's eye of the fashion; but of gentlemen how many? Let us take a little scrap of paper and each make out his list. (621-22)

この引用箇所の直後の文は, “My friend the Major [Dobbin] I write, without any doubt, in mine. He had very long legs, a yellow face, and a slight lisp, which at first was rather ridiculous. But his thoughts were just, his brains were fairly good, his life was honest and pure, and his heart warm and humble.” (622) であるが, このコメントからドビンが紳士の鑑であることが分かる。

また, 表 6 の, 彼の長所を示す表現を見れば, 美点が多いことが明白である。それを理解するためのキーワードは, ‘good-natured’, ‘honest’, ‘brave’, ‘cleverest’, ‘accomplished’, ‘our [Amelia and Georgy’s] dearest, truest, kindest friend and protector’, ‘most upright’, ‘pious and reverent’, ‘quiet’, ‘generous’, ‘humblest’ 等の表現である。これらの言い換えもドビンの特徴を裏付ける証しとなる。

彼の短所は, 少年時代は彼の学友ジョージとは対照的に成績不振であったこと, 手足が大きすぎて不格好であること, アミーリアのために偽善的なふるまいをする点くらいである。ドビンは努力によって徐々に成長発展を遂げる人物であり, 作品全編を通じて見れば, 彼の欠点は “Love is blind.” が当てはまることである。

彼の比喩的表現には, その性格を示すものが多い。例えば, ‘his [George’s] valet, his dog, his man-Friday’ や ‘a great Newfoundland dog’ は従順な農耕馬的性格を, ‘this Machiavellian captain of infantry’ は偽善的性格を, ‘Major Sugarplums’ は心の温かい性格を示している。‘Figs’ は, スウィシュテイルの学校 (Dr. Swishtail’s academy) で彼に付けられていたあだ名である。ドビンの父親が経営していた食料雑貨店の名前が ‘Figs & Rudge, Thames St., City’ であったために父親の商売が揶揄されたことになる。

ここで, ドビンの主な功績を列挙すれば次のようになる。

- I. 少年時代, ジョージをカフ (Reginald Cuff) の暴力から救い, 軍隊に入ってからジョージに金を融通し有益な助言を与えたこと。
- II. アミーリアがジョージと結婚できるように骨折ったこと (この尽力は, 実はドビン自身の幸福のためでもあった。ドビンにとって, アミーリアの苦しみを見るのは耐えがたいことであったから)。
- III. アミーリアのピアノを買い戻して彼女に贈ったこと (82 頁で既述)。
- IV. ワーテルローの戦いの後, ジョージの遺骸を埋葬したこと。
- V. ジョージの死後, 精神的・肉体的に瀕死の状態になったアミーリアを支えたこと。
- VI. アミーリアとジョージに精神的・経済的支援を続けたこと。
- VII. セドレー一家に対する, ジョン・オズボーンの頑固な拒絶的態度を軟化させ和解させたこと (オズボーンの性格は大きく変化してドビンの性格に近づく)。
- VIII. ならず者たちの手からアミーリアとジョージを救い出したこと (第 67 章)。
- IX. ベッキーに宛てたジョージの手紙の件を知りながら, それをアミーリアには隠していたこと。

最後に、ドビンとベッキーの特徴が同時に分かる個所を紹介しよう。これは、作品の第 66 章で、ドビンがアミーリアと口論をしてから彼女に決別を告げる場面である。この時、二人のやり取りをベッキーが立ち聞きするが、その時、彼女は次のように考え、ドビンを賞賛する。太字部は、表 6 のドビンの長所に挙げられている言い換えである。

“What a noble heart that man [Dobbin] has,” she [Becky] thought, “and how shamefully that woman [Amelia] plays with it.” She admired Dobbin; she bore him no rancour for the part he had taken against her. It was an open move in the game, and played fairly. “Ah!” she thought, “if I could have had **such a husband as that—a man with a heart and brains** too! I would not have minded his large feet;” —and, running into her room, she absolutely bethought herself of something, and wrote him a note, beseeching him to stop for a few days—not to think of going —and that she could serve him with A. (670)

ベッキーは、ドビンの美点を的確に述べている。彼が気高い心の持ち主でありベッキーに対して率直にフェアにふるまったことを認めている。彼女は、ドビンのような男を夫に持てたなら足の大きさ等は気にしなかっただろうと考える。ドビンの善良な人柄とベッキーの人物観察の鋭さと感じられる個所である。また、ベッキーは、この場面でドビンを引き留めるために短い手紙を書くが、これもベッキーの美点に付け加えて良い。

④ レディ・ジェーン・シープシャンクス

彼女は俗物ではない。表 6 から分かるように、美点が多い。善良で誠実、優しく寛大な性格である。子供を大事に可愛がるので、ローディーは実の母親よりもこの女性を慕うほどである。唯一の欠点は（表には挙げていないが）料理下手なことである。

ベッキーを面罵できる勇気も持っており、それは次の台詞に表れている。ジェーンは、スタイン侯爵との関係は潔白であると弁明するためにピットの屋敷を訪れたベッキーを次のように攻撃する。太字部は、表 6 のベッキーの短所に挙げられている言い換えである。（下線は筆者。）

“Upon my word, my love, I think you [Lady Jane] do Mrs. Crawley injustice,” Sir Pitt said; at which speech Rebecca was vastly relieved. “Indeed I believe her to be——”

“To be what?” cried out Lady Jane, her clear voice thrilling, and her heart beating violently as she spoke. “To be a wicked woman—a heartless mother, a false wife? She never loved her dear little boy, who used to fly here and tell me of her cruelty to him. She never came into a family but she strove to bring misery with her, and to weaken the most sacred affections with her wicked flattery and falsehoods. She has deceived her husband, as she has deceived everybody; her soul is black with vanity, worldliness, and all sorts of crime. I tremble when I touch her. I keep my children out of her sight. I—” (549)

このように、ジェーンは、重大な局面ではベッキーを激しく非難するだけの強さを発揮する。なお、彼女の最大の功績は 100 ポンドを用立てて債務者拘留所からロードンを救い出したことである。

⑤ スタイン侯爵

この人物の長所は皆無に等しい。その性格を如実に反映する言葉は、表 6 の中の ‘The atrocious monster’ である。彼の妻は、ギャンブルで相手の借金の担保として獲得された人である。彼は、自分の妻と息子の嫁を虐待し、ベッキーとの逢瀬を楽しむことを目的として、彼女の周囲の人々を体よ

く追放する。ローディーを私立学校へ入れさせたという「善意」は実は策略であったし、ミス・ブリッグズに他の屋敷での職を斡旋したのも彼女がベッキーの家に居続けると邪魔になるからだった。更に、ロードンを債務者拘留所に入れるために策略を弄したのも、ベッキーとの密会を安全にするためだった。スタインは、ベッキーとの破局の後には、彼女との接触を断つため彼女を脅迫さえしている。

ロードンはスタインを次のように罵倒し攻撃する。これは、ベッキーがスタインと密会していた現場に踏み込んだ時の場面である。太字の部分は、表6のスタインの短所に挙げられている言葉。

But Rawdon Crawley springing out, seized him [Steyne] by the neck-cloth, until Steyne, almost strangled, writhed, and bent under his arm. “You lie, you **dog!**” said Rawdon. “You lie, you **coward and villain!**” And he struck the Peer twice over the face with his open hand, and flung him bleeding to the ground. (533-34)

スタインは、ここに述べられているような責めを受けて当然である。

⑥ サー・ピット・クロリー

サー・ピットのイメージは、表6の中の ‘bald head’, ‘red face’, ‘grin’, ‘a man of the world’, ‘an old, stumpy, short, vulgar, and very dirty man’, ‘a horrid pipe’, ‘low life’, ‘a more cunning, mean, selfish, foolish, disreputable old man’, ‘a man who could not spell, and did not care to read—who had the habits and the cunning of a boor’, ‘an old *put* and old *snob*’, ‘the rascal’ で集約できよう。1語で表せば俗物である。短所ばかりで長所は皆無に等しい。吝嗇、酒好き、訴訟マニア、無教養、粗野、利己的、という形容がふさわしい。しかし、スタイン侯爵とは異なる性格の持ち主である。例えば、名誉や世間体は無視する気質であるため、妻の死後、家庭教師のベッキーに求婚しても平気である。生憎、ベッキーは秘密裡に結婚を済ませていたので彼の求婚は失敗に終わってしまうが。

ベッキーがクロリーの館を去った後のサー・ピットの墮落の様子を引用で見よう。太字部は、表6のサー・ピットの短所に挙げられている言い換えである。

Since the departure of Becky Sharp, **that old wretch** [Sir Pitt Crawley] had given himself up entirely to his bad courses, to the great scandal of the county and the mute horror of his son [Pitt Crawley]. The ribbons in Miss Horrocks’s cap became more splendid than ever. The polite families fled the hall and its owner in terror. Sir Pitt went about tippling at his tenants’ houses; and drank rum-and-water with the farmers at Mudbury and the neighbouring places on market-days. (330)

ここに描かれているのは、自分の執事の娘に牛耳られている哀れな老人の姿である。彼のこのようなふるまいには、富も地位もありながら、独裁的な力をふるう人々への風刺が感じられる。彼の最期は惨めである。

しかし、彼には、滑稽な側面も見られる点を忘れてはならない。例えば、自分に不利な状況では突然耳が聞こえないふりをする場面がユーモラスである。

⑦ ピット・クロリー

ピットは父親や弟のロードンとは正反対の人物である。表6の言い換え表現から分かるように、この人物を紳士と呼んでも良い。しかし、打算的で世渡りが巧みなマキャヴェリ的な紳士である。大学

卒のインテリで堅実な生活を送ることに専心するが面白みはない紳士である。世間的な成功と名誉に執着し体面を重視する。若い時代は、あまりにも女性的であったので ‘Miss Crawley’ と呼ばれる始末だった。虚弱なイメージの人物である。彼にしても、ベッキーの手管にかかるとその術中にはまってしまい、彼女の上流社会への参入を援助せざるを得ない。但し、時々、美点も発揮する。例えば、ロードンがスタイン侯爵との決闘をピットに予告する場面では、ロードンが決闘で倒れた時にはローディーの面倒をみることを約束する。

次の引用は、ミス・クロリーのピット評がうかがえる個所である。ベッキーと類似点の見える、この無政府主義的老嬢は、ピットの偽善的態度を看破する力を備えており、ピットよりもロードンをひいきにする。太字の部分は、表6のピットの短所に挙げられている言い換えである。

Silly romantic Miss Crawley far from being horrified at the courage of her favourite [Rawdon] always used to pay his debts after his duels, and would not listen to a word that was whispered against his morality. “He will sow his wild-oats,” she would say, “and is worth far more than **that puling hypocrite of a brother of his** [Rawdon’s].” (98)

⑧ ロードン・クロリー

ロードンには、『ヘンリー四世』(*King Henry IV*, 第1部 1596-97, 第2部 1598) のフォルスタッフ (Sir John Falstaff) を連想させる性質が少なくない。特に、彼の短所はフォルスタッフに酷似している。但し、彼の性格は物語が進行するにつれて変化する。俗物的で直情径行的な無軌道の青年だった彼は、若いころの罪を徐々に悔い改める。彼のような、性格上の大きな変化が見られるのはジョン・オズボーンの外に見当たらない。彼の最大の美点はスタイン侯爵を殴り倒し、ベッキーと決別すること、謂わば引導を渡したことにある。

長所を示す表現からは、彼が、ダンディであり、拳闘、ネズミ狩り、ファイブズ (ハンドボールの一種)、4頭立て馬車を一人で走らせるスポーツにたけていたこと、愉快で率直で勇敢な大柄の体軀の男であることが分かる。軍人時代の彼は、ジョージのライバル的存在である。

以下に、長所の中の ‘a very watchful and exemplary domestic character’ が含まれている文を引用しよう。これは、結婚後の彼の特徴を表す言い換えである。それは未婚時代からの大きな変身ぶりを示している。但し、このような用心深く模範的な家庭的な性格へと変わった理由は、妻の素行監視の目的もあった。

Rawdon said she [Becky] should not join in any more such amusements, but indeed, and perhaps from hints from his elder brother and sister, he had already become **a very watchful and exemplary domestic character**. He left off his clubs and billiards. He never left home. He took Becky out to drive: he went laboriously with her to all her parties. (526)

更に彼は、ローディーが生まれてからは息子を溺愛する子煩悩ぶりを見せる。ローディーがパブリック・スクールに入学するにあたっては、父親の方が子よりも悲しい思いをするほどだった。彼はレディ・ジェーンに対して、自らの変貌ぶりを、“you—you don’t know how I’m changed since I’ve known you, and—and little Rawdy. I—I’d like to change somehow. You see I want—I want—to be—.” (532) と言っている。

他方、ロードンの短所は長所の数を凌ぐ。無頼漢、ギャンブラー、大酒飲み、人殺し (彼は決闘を3

回行い、相手を一人殺した実績がある)、愚か者、役立たず、放蕩者等の言葉が彼に当てはまる。教養が足りないので、ミス・クロリーへの手紙を代筆するのは彼の妻である。結婚後は、ベッキーの思うままに操縦される肥満した中年男となる。

このように、短所が多いが、ロードンの変化を考えると彼は愛すべき人物であると言えよう。少なくとも、兄のピットよりも興味深い性格である。フォルスタッフと共通する魅力がある。

以上、3つの項目を見てきたが、最後にサッカリーの人名の使い方と性格描写の特徴をまとめておくこととする。第1に、彼は多数の人物をその名前の意味によって印象的な性格にすることができた。大半の人物が、その巧みなネーミングのおかげで、性格が端的に理解できるように工夫されている。第2に、彼はさまざまな言い換えによって、主要人物の特徴を多角的に把握できるように描写できた。この小論で取り上げた主要人物について見れば、言い換え表現の多い上位4名の人物は、ベッキー(240箇所)、アミーリア(210箇所)、ドビン(150箇所)、ロードン(100箇所)となる(数字は概数)。第3に、作中では、聖書や神話・伝説、文学作品等の人物等、多彩な名前が利用されている。これらが『虚栄の市』の世界を彩り、この長編の面白みを倍加している。第3の特徴については触れることはできなかったが、例えば、レディ・サウスダウンがマクベス夫人(Lady Macbeth)のイメージでベッキーに薬の服用を半ば強制する場面(第41章)はこの二人の人物の特色を如実に表している。

(この小論は平成21年9月13日に英米文化学会第27回大会において行った発表原稿を加筆修正したものである。)

注

- 1 歴史小説の制約上、実在した名前を採用せざるを得なかったと思われる人物としては、ウェリントン公爵(Duke of Wellington, 1769-1852)やナポレオン1世(1769-1821)、ネイ元帥(Michel Ney, 1769-1815)、ジョージ4世(1762-1830)等が該当する。なお、作中には、語り手に情報を提供するTom Eavesという特異な人物が登場する。
- 2 Bennett, Mildred R. *CLIFFS NOTES on THACKERAY'S VANITY FAIR*. Lincoln: Cliffs Notes, 1989. この本の57~58頁に書かれている情報。以下、*CLIFFS NOTES*と表記。
- 3 出典はPickering, David. *The Penguin Dictionary of First Names*. 2nd ed. London: Penguin Books, 2004. この表には‘POPULAR FIRST NAMES’というタイトルしかつけられていないが、1800年における男女別の洗礼名の上位10種と判断される。
- 4 ‘Mary’という名は、John Sedleyの妻の名として、また、Mary Clappのようにマイナーな人物の名としても出てくる。
- 5 中島賢二訳『虚栄の市』第四巻408-10頁、岩波文庫、2004年参照。
- 6 人名の意味については、注3に示した辞典以外に次の辞典の説明によるものが多い。
 - *The Oxford English Dictionary*. SECOND EDITION on CD-ROM Version 3.1.1. Oxford: Oxford UP, 2005. 以下、*OED*と表記。
 - Reaney, P. H. and Wilson, R. M. *A Dictionary of English Surnames*. Revised ed. Oxford: Oxford UP, 2005.
 - Hanks, Patrick and Hodges, Flavia. *A Dictionary of First Names*. Oxford: Oxford UP, 1991.
 - 竹林滋編集代表『研究社新英和大辞典』第6版、研究社、2002(LogoVista電子辞典)。以下、『研究社新英和大辞典』と表記。
- 7 『研究社新英和大辞典』の定義。以下、人名の日本語での意味(「 」で示したもの)はすべてこの辞典による。

- 8 ベネットによれば、表5に載せた人物以外にも以下の人名（イタリック部）に、特定の意味がある。
Frederick *Bullock*; the Reverend Mr. *Crisp*; the Reverend Mr. *Flowerdew*; Miss *Hawky*; *Bowls*; *Vere Vane*; Ensign *Spooney*; old *Heavytop* the Colonel; *Knuckles* the private; *Cackle* the assistant surgeon; Mr. *Chopper*; *Dipley*; young *Stubble*; Dr. *Ramshorn*; Mr. *Wagg*; Capt. *Ragg*; Mr. *Bawler*; Mrs. Hook *Eagles*; Miss *Swindle*; stout Will *Steadfast*
- 9 *Vanity Fair*からの引用はすべて次の版による。
Shillingsburg, Peter. Ed. William Makepeace Thackeray. *Vanity Fair*. New York: W. W. Norton & Company, 1994.
- 10 Reaney, P. H. and Wilson, R. M. *A Dictionary of English Surnames*.
- 11 『虚栄の市』では、ドビンの妹のアンは Ann から Anne へ変わる。作者の不注意。
- 12 このモデルに関する情報はすべて次の書による。
Handley, Graham. *Penguin Masterstudies: Vanity Fair*. Bungay: Richard Clay (The Chaucer Press), 1985. p. 106.
- 13 Peter Shillingsburg の注釈による。Shillingsburg は ‘the Prince of Wales’s friend’ を次のように説明している。
Francis Rawdon-Hastings (1754-1826), first marquis of Hastings and second earl of Moira, governor-general of Bengal (1812-21), was a military man involved in at least one duel and politically opposed to both Pitt and Dundas. His support for the prince of Wales went largely unrequited when the prince became regent. (66)
- 14 *CLIFFS NOTES*, p. 58.
- 15 作中で使用されている比喩は、厳密には、明喩、隱喩、換喩、代喩、引喩のように分類できるであろうが、この小論では比喩の種類を分類する余裕はなかった。なお、‘Mrs. Pride’ は作中では擬人化された性格である。但し、‘Pride’ は実在する名である。
- 16 『マイクロソフト エンカルタ 総合大百科 2006』(DVD-ROM) による。原文の一部を少し変更した（ふり仮名を削除したり、平仮名を漢字表記に変更したりした）。
- 17 これは Gerald Ajam によってスキャンされた画像であり、インターネット上で閲覧ができる。画像のリンク先は <http://www.victorianweb.org/art/illustration/thackeray/67.1.html> である。
- 18 アミーリアは少女時代にドビンに会っているので、実際は彼の美点に気づかなかったにすぎない。

(なかむら たけし 英語コミュニケーション学科)